安心な暮らしいつまでも

県内先進事例たずねて

年齢を重ねても住み慣れた地域で安心して暮らせるように、一体的にケアを提供する「地域包括ケアシステム」づくりが県内でも始まっている。医療や介護、社会福祉の専門職と民間事業者、住民グループなど多様な主体が連携・協力する仕組みだ。多職種連携などの先進モデルや、県内での議論をリードする専門家の解説などを交え、これからの支え合いの地域づくりを考える。

長岡福祉協会「こぶし園」

本人の意思尊重　住み慣れた街で

地域包括ケアシステムの先進事例として注目を集め、全国から視察が相次ぐ長岡市の社会福祉法人、長岡福祉協会「高齢者総合ケアセンターこぶし園」。掲げるのは、利用者の住まい方に応じた看護や介護、入浴、食事など「24時間365日連続するケアの提供」だ。同市内18カ所に配した地域密着型居宅支援サービス拠点「サポートセンター」の取り組みをたずねた。

サポートセンター摂田屋の納涼祭。利用者らも太鼓の音に合わせた手ぶりで盆踊りを楽しんだ＝8月27日、長岡市摂田屋5

JR宮内駅近くの住宅街にある「サポートセンター摂田屋」。8月最後の週末、祭り提灯が飾られた地域交流スペースは、納涼祭のミニゲームや太鼓演奏、盆踊りを楽しむ人でにぎわった。

入居者とその家族、町内の家族連れらがジュースやビール片手におしゃべり。町内の吉原正行さん（61）は同センターの特別養護老人ホームに入居する母フジさん（88）に「おやつ食べようか」と笑顔で声を掛け、口元にゼリーを運んだ。

家族「自宅と同じ」

フジさんは入居5年。それまでは新潟市のリハビリ施設で暮らしていた。当時は週2回見舞うのがやっとだったが、定年退職したこともあり、現在は昼食の介助などに毎日通う。「以前より反応は薄くなったが、毎日話しかけて刺激を与えられる。介護を受けながら、まるっきり自宅と同じようでありがたい」と感謝する。

同特養の舩越芳之業務課長は「入居者には『自宅から近くに住み替えただけ』と感じてもらえる。家族だけでなく、昔なじみの友人も気軽に訪れる」と話す。納涼祭のような行事を定期的に開催するのも、住民が足を運びやすいように。近所の子どもが遊ぶキッズルームや、大人の雰囲気が漂うカウンターバーまであり、ボランティアが気兼ねなく憩う場も設けた。

近所が納得、親近感

同センターには特養のほか、小規模多機能型居宅介護と認知症対応型共同生活介護、在宅支援型住宅、配食サービスがある。舩越課長は「これからセンターを利用するかもしれない人たちにも見てもらい、ここならと納得し、親しんでもらえたら」と地域密着の意義を語る。

同法人が1982年に設けた特別養護老人ホーム「こぶし園」は、定員100人の大規模施設で、長岡市郊外の山の上にあった。しかし、在宅介護が困難なため家族と離れ、否応なしに入居する現実を改善しようと早くから動き出した。

施設分散　ニーズに対応

24時間365日化

訪問看護ステーションを立ち上げ、ショートステイや24時間365日型訪問介護・看護、3食365日配食などの居宅介護支援サービスを順次追加した。いずれも2000年の介護保険制度開始前だ。

02年には施設機能を地域社会に分散するため、独自モデルとしてサポートセンターの開設に着手。国や長岡市に働きかけ、民間事業者とも協力し拡大してきた。

各サポートセンターは地域ニーズに応じ、自宅訪問と事業所への通所を組み合わせる「小規模多機能型居宅介護」や、自宅への定期巡回・随時訪問介護・看護、在宅療養支援診療所、通所介護、ケアハウスなどの住まいの機能を持つ。健康増進・予防センターを併設したセンターもある。

こぶし園の吉井靖子総合施設長は「施設を地域に置き換えれば、居室が利用者の住まいで廊下が道路とのイメージ。施設に入居しなくても、同様の充実したサービスを自宅や地域で受けられる」と説明する。

郊外の特養「解体」

06年からは、こぶし園の入居者100人をもともと住んでいた地域に戻す「特養解体」にも取り組み、14年にはすべての入居者が移り終えた。

吉井施設長は「本人と家族が『どういう暮らしをしたいのか』が何より大切だ。在宅介護か施設入居かの二者択一ではなく、要介護や認知症になっても、住み慣れた地域で、家族とも近い生活が可能なシステムを作ってきた」と強調。今後は利用者の負担を軽減する定額制サービスの拡大を目指すほか、テレビ電話やタブレットなどを活用し、介護現場でのICT化を進める方針。「医療との連携により力を入れたい」と話した。

ささえ～る+
地域包括ケアネット

サイト「ささえ～る+」　11月「おとなプラス」と連動

信頼の県内専門家コラム
県内外ニュースは毎日更新

新潟日報社はホームページ上に医療・福祉・介護に関する情報を広く集約するサイト「地域包括ケアネット　ささえ～る+（プラス）」を展開中だ。住み慣れた地域で安心して暮らしていけるよう、さまざまな情報を発信している。今後は新潟日報社が11月1日に創刊する新情報紙「Otona+（おとなプラス）」でも毎週土曜日に「ささえ～る+」ページを設け、サイトと連動させる予定だ。

現在のコンテンツは下記の通り。

①**県内医療・介護の最前線で県民に寄り添う専門家、識者によるコラム。**例えば認知症については初期症状への対応や予防、最新研究成果などを紹介。在宅での介護力を高めるアドバイスや、女性特有の病気についての解説、子どもの健康など分野ごとにまとめている。

②**新潟日報モアとリンクしたニュース。**人気コーナーの「みんなの診察室」など朝刊掲載の医療・健康関連記事や、未掲載の共同通信配信記事も伝える。

③**県内の医療機関と福祉・介護関連施設の検索システム。**およそ7000件のデータから、地域や診療科目にチェックを入れて施設を探すことができる。

④**医療や介護のイベント情報発信。**NIC新潟日報販売店の健康セミナーや、行政、民間の地域セミナー案内も随時掲載する。このほか地域包括ケアシステムについては、国際医療福祉大大学院教授の武藤正樹氏と、県医師会副会長で吉沢医院（同市南区）院長の吉沢浩志氏が詳しく解説している。

「ささえ～る+」のアドレスは　http://sasayell.jp